

日本ディサースリア臨床研究会 副会長
 姫路獨協大学医療保健学部言語聴覚療法学科、獨協医科大学神経内科
 福永真哉

ディサースリア臨床研究誌が発刊されるようになって本号で通算3巻目となりました。その間に第1回学術大会が開催され、本邦でもディサースリアの言語治療を実践している言語聴覚士が日々増加していることを実感しています。まず、巻頭の言にあたり、本会の発足においてご尽力いただいた先生方、関係者の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。さて今回は、私がディサースリアの臨床に興味をもって取り組み始めたきっかけをお話したいと思います。私が言語聴覚士（当時は国家資格ではなく言語療法士と呼ばれていました）になった頃、当時勤務していた病院の臨床現場でお会いする患者さまは、圧倒的に失語症の方が多く、ディサースリアの患者さまは少ない状況でした。また当時は、ディサースリアの治療法が体系的に記載された書籍や論文も少なく、まれに開催される講習会や先輩の臨床を見学させていただく機会を得るなどして、手探りでやっているような状況でした。しかし、その数少ない情報の中で、むさぼるように読んでいた音声言語医学誌にある時から彗星のように毎回、論文を出される言語聴覚士の先生がいました。それが本研究会会長の西尾先生でした。当時は面識が全くなかったものの、失語症の研究を行いその成果を雑誌に投稿していた私にとっては同年代（後で伺ってみると多少異なっていたのですが、当時は勝手にそう思い込んでいました）の先生が活発に論文を出されているのは大いに励みになり、また、論文の内容も悩んでいた症例の治療への示唆に富んでおり、とても興味をもったことを今でも鮮烈に覚えています。その後、私は国際医療福祉大学の伊藤元信先生（現宇都宮大学監事）に師事する機会を得て、ディサースリアの臨床の面白さを教えていただいたのですが、その後福岡に戻ることとなった私と入れ替わりに国際医療福祉大学に着任されたのが西尾先生で、いわば伊藤先生の門下生というつながりを得て西尾先生との親交が始まりました。親交を重ねてゆくうちに西尾先生のディサースリア臨床にかける熱い思いに触れ、また、先生から得た知識を臨床において実践してゆくうちに、本研究会の活動に参加するようになったといえます。

私のこれまでの臨床活動では、訓練させていただいた患者さまお一人お一人の言語症状を少しでも改善しようと向き合うことで、患者さまから治療法の道筋を教えていただき学び、自分の技量も向上させていただいてきたと思っています。そういった意味では患者さまの病態と向き合い、格闘して苦労した分だけ技量（スキル）は身につくと思っています。この20年の間に、ディサースリアの臨床においてはCIセラピー、反復促進療法など脳科学的視点をもった訓練法が次々に開発され、革新的な変化を遂げてきました。しかし、まだまだ、その革新は十分ではなく臨床現場では究明されていない言語症状や治療法開発の余地が数多くあります。ぜひ、中堅の先生方、若い先生方をお願いしたいのは、先生方の臨床活動において抱いた疑問点もしくは新知見を本研究会で積極的に発表していただきたいということです。そして、この研究会で発表し、志を同じくする仲間と議論し、自分でも納得が得られたら、ぜひ本誌に投稿してください。この会は若い会員の皆さんが、作り上げ参加してゆく成長期の会だと思っています。まず荒削りでも良いので、積極的な研究会発表、論文投稿をお待ちしたいと思う気持ちをこめて巻頭の言葉の締めくくりにしたいと思います。